

エミツクの視点から見えるトイレの問題

杉田映理

●はじめに

今年二〇〇八年は「国連・国際衛生年」である。国際衛生年の設置は、二〇〇六年メキシコで開催された第四回世界水フォーラムで、衛生問題の立ち後れを懸念して国連「水と衛生に関する諮問委員会」が提案した。当時の諮問委員会の議長は故・橋本龍太郎氏、そして現在日本の皇太子が同委員会の名誉総裁に就任している。国際衛生年の狙いは、トイレの普及率を高め、人々の衛生行動の向上を推進しようというものだ。トイレや排泄行動は文化的な慣習やタブーが絡む問題である。開発援助を実施する際に、対象地域の社会や文化を理解することの必要性に異議を唱える関係者はもはや少ないだろうが、案外現地社会の理解は簡単ではない。ここでは文化人類学で用いられるエミツク、エティツクという概念を通じて、トイレの問題を内側から考えてみたい。

●「ず」と「づ」

「ず」と「づ」、この二つの文字を声に出

して読んでみて欲しい。発音に違いはあるだろうか。日本人の多くは同じように発音するだろう。では、表音文字であるはずの仮名になぜ二通りの書き方があるのか。理由は至極単純で、二つの仮名の発音は元々異なっていたのだ。発音記号で書けば「ず」は「ʒu:」、「づ」は「dʒu:」であった。「ず」と「づ」の違いが書き言葉では現在も残っているのはご承知のとおりだ。ワープロで「ず」と「づ」を打ち間違えて自分が思っていた漢字に変換されなかった一例えば「きず（築）く」と「きづ（気付）く」などという経験があるのは私だけではないと思う。

室町時代頃までは、「ず」と「づ」（そして「じ」と「ぢ」）は違う音として認識され、発音されていた。昭和五〇年代でも九州の一部や高知県、和歌山県、三重県、山梨県の一部では、「ある年齢以上の人びとは」「ず」と「づ」をはっきり区別して発音していたという記述がある（参考文献①）。しかし今日、我々の多くは「ず」と「づ」を区別せずに発音するばかりか、「ʒu:」と「dʒu:」を違う発音で話されても、その違い

が聞き取れなくなっている。これは、音声学的にみれば（発音記号の違いが示すように）別の音であっても、現代の日本語の発音では両方とも一つの「引き出し」に整理されてしまっただけで、同じ音として認識されることによる。一つの「引き出し」に入れられる音の群を言語学では音素(phoneme)とよび、「二つの文化における言語体系のなかで識別の可能な音声の単位」と定義されている。

身近な例をもう一つ見てみよう。英語でRとLは全く別の音（音素）だと認識され、rightとlightは区別して発音されるが、日本語の言語体系ではその区別がなくR/Lは一つの音素として整理されている。そのため「ライトウ」としか聞こえず、またそう発音して英米人に苦笑されるのである。要するに音という、極めて客観的に知覚できると思われがちなものも、「整理するための引き出し」が分かれておらずある程度の訓練がなければ、その違いを区別して認識することはできないのである。学生だった私が言語人類学の授業でこのことを学んだとき、目から鱗が落ちる思いで少な



開発援助と人類学

からぬ興奮を覚えたことを記憶している。

●エミックとエティック

個々の言語において機能的に区別されている音の単位を抽出し、人々がどのように音声を意識し、知覚し、識別しているかを分析する領域を音素分析という。これに相對するのが音声学で、発音記号を使って実際に発音された音を可能な限り客観的に記録し分析してゆく作業を行う分野である。

このように言語の音素的 (phonemic) な側面と音声的 (phonetic) な側面の違いを認識するという言語学の考えを応用したものに、エミック (あるいはイーミック、emic) とエティック (etic) という概念がある。これは世界各地で先住民の言語を調査した言語学者バイク (K. L. Pike) が提唱した概念で、phonemic、phonetic から phon という接頭語を除いた造語だ。バイクは、言語以外の文化現象においても、音声と音素に見られるような違いを認識することの重要性を指摘したのである。

フィールドワークをベースとし、世界各地の地域社会の研究を行う文化人類学では、このエティックとエミックが重要な分析概念となっている。エミックな研究は、文化の内側から、すなわち文化の構成員の視点から見て意味を持つ概念や世界観を理解することを目的とする。一方、エティックな研究は、客観的で通文化的な尺度を用いて、文化を外側から分析するものである。エ

ティックな尺度や概念は比較を可能にする。

エミックとエティックの解釈をめぐることは各種の議論が展開されてきた (参考文献②)。例えば、エティックの視点はどこまで客観的になり得るのか、客観的・科学的といってもそれは科学という現代西洋文化の視点から見たエミックの一つではないか、などが代表的な議論である。

ここでそうした議論の詳述はしないが、いずれにせよエミックとエティックという二つのフレームがあることを認識し、分析を行うことの有用性は高い。個別の文化のエミックな研究と、通文化的な比較を可能にするエティックな研究は対立するものではなく、相互補完的なものだと言える。

開発援助において援助の対象地域や現場について理解しようとするときも、内側からのエミックな視点と通文化的なエティックの視点を相互補完的に用いることが重要だと考えられる。私はかねてから文化人類学者が民族誌などで描写する村落と、開発関係の文書で記述される村落が、途上国の同じ地域を扱いつつながら奇妙なほど異なることを感じていた。まるで魚眼レンズで撮った写真と航空写真との違いのように、同じ風景を撮ったはずなのに印象が全く違う。民族誌の全てがエミックな研究ではないが、民族誌は地域の人々の世界観で重視されている側面に焦点をあて内側から記述される傾向が強い。開発援助を実施する際に収集される情報は、人口、所得、乳幼児死亡率、

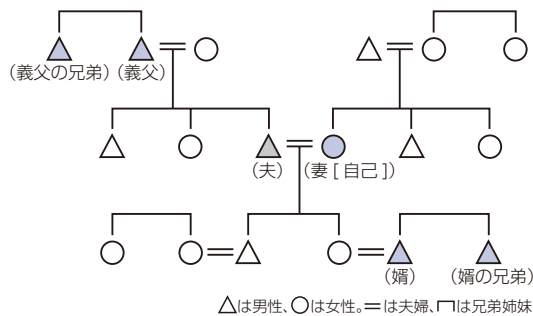
給水率など、通文化的な用語や統計を用いて捉えられるものが主となっている。

●ウガンダのギス民族における 忌避関係

さて、ここでエミックな視点から見えてくる「忌避関係」という社会関係を取りあげ、ウガンダのギスを事例に考えてみたい。忌避関係とは、特定の関係にある相手との接触や会話 (特に性的内容を示唆するもの) が、社会慣行上タブーとなっている行動様式を指す。姻族の隣接世代の異性間に見られる場合が多いが、具体的にどの相手が忌避関係の対象となるかは、それぞれの社会によって異なる (参考文献③)。

忌避関係は、アフリカのみならず大洋州や北米のネイティブアメリカンなど多くの文化で見られ、文化人類学の研究対象となってきた。忌避関係の存在理由の説明として、ラドクリフ・ブラウンという人類学者は、姻族間の微妙な利害関係において秩序を保ち葛藤状況を回避するためだとしている。夫と義母、妻と義父との性的関係を未然に防止するためという説も挙げられる。ウガンダのギスの例を見てみよう。ウガンダの東部、ケニアとの国境にまたがって標高四三〇〇メートルのエルゴン山がそびえている。ギス民族は、このエルゴン山の南麓から西麓の一角を本拠地とするバンツィ系の農耕民である。筆者は、エルゴン山の南側のなだらかな丘陵地帯、現在のブ

図1 プマサーラの関係図



プロ県(旧ムバレ県、プロ郡)、ブゴベロ地区でフィールドワークを行った。

ギスの社会にも忌避関係が存在し、その関係を示す「ブマサーラ (Bumasa)」という言葉が存在する。忌避すべき相手は姻族

関係にある隣接世代の異性の一部となっている。例えば、図1の中央の女性(○)が「自己」だとすると、「義父」および「婿」がブマサーラの関係にある相手となる。さらに、「義父の男兄弟」や「婿の男兄弟」とも忌避関係が生じる。一方、男性側から見れば、「義母」並びにその姉妹、「嫁」並びにその姉妹、がブマサーラの対象になる。

女性にとって義父の男兄弟、婿の男兄弟、男性にとって義母の姉妹、嫁の姉妹まで忌避関係の対象となるのは、ギスの親族間の対人関係で同性の兄弟姉妹が同カテゴリーの人々として認識されるためだと考えられる。例えば、父親の兄弟(父方オヂ)を「お父さん」(Papa)と呼び、母親の姉妹(母方オバ)を「お母さん」(Mama)と呼ぶばかりか、いわゆる社会的距離も父方のオバや母方のオヂより近いものとなっている。

では、ギスにおける忌避関係とはどのようなもののだろうか。「Fear friend」と表現されることもあるように、敬意と畏れの両方があるといわれ、特定の交わり方が忌避される。その忌避される代表的な行動として、握手を含む一切の身体接触に加え、隣どうしに座ったり、隣どうしに立ったりすることもタブーとされている。ギスの村

に住み込んでいた私が日本の家族の写真をギスの友人達に見せると、私の兄の妻と、私の父とが隣どうしに写っていることに、目を丸くして驚かれることが度々あった。

また、直接の接触の可能性がなくとも、例えばブマサーラの関係にある相手が座っていた椅子に座ることや、同じ器から食べることも回避される。水浴びやトイレへ行くところを見られる、さらには同じトイレを使うことも全てタブーとされている。

こうしたタブーを犯すと「ブマサーラに捕まえられる」と言われ、非常に恥ずべき行為であるとともに、悪運に見舞われると考えられている。この忌避関係は単に慣行上のルールというよりも、その文化においては、情緒的反応を伴う強い感覚を喚起するものとなっている。まさしくエミツクな視点に立てば、見逃せない事象なのである。

●ブゴベロのトイレの話

ブマサーラの関係にある人と同じトイレを使うのはタブーであることに言及したが、「衛生改善」の観点からはこれが問題になる。ギスの土地相続制度では、土地は父親の生前に父親本人が分配する。別途土地を購入する以外は、父親と息子達の土地は必然的に隣あわせになることが多く、家も隣接することが普通である。つまり嫁と義父が隣どうしに住まうことになる。トイレは母屋から離れた敷地の隅につくられるが、父と息子家族の二世帯がトイレを共有する

ことがある。その場合、嫁はそのトイレを使わず、日常的に別の隣人のトイレを借りるか、野外排泄をせざるを得ないのである。

ブゴベロのトイレは、いわゆるポットン式のピット・ラトリンが主流である。上部構造は簡易な土壁と藁葺き屋根でつくられるが、上部構造はなく穴だけのトイレも時々見られる。経済的に余裕のあるごく一部の世帯では、スラブとよばれるコンクリート式の板敷きを利用していた。

穴がいつばいになれば上部構造を取り壊し、敷地内のどこか別な場所に穴を掘って新しいトイレをつくる。この地域では地層に岩盤が通っているため、穴を深く掘れない場所が多く、比較的頻繁にトイレをつくりかえる必要がある。トイレを持つ家庭の七割以上が、現在のトイレの築後年数は三年未満だと言っていた。大抵の場合、使っていたトイレがいつばいになってから新しいものをつくり始めるため、その間、家庭にはトイレのない状態が続く場合が多い。

トイレの建設は、穴を掘るのも上部構造を建てるのも、ギスの社会では男性の仕事とされている。特に穴を掘るのは墓穴を掘ると同様、男性しか携わることが許されない。夫がなかなか新しいトイレをつくってくれないと、家庭で過ごす時間の長い女性達がこぼすのを私は度々聞いたものだ。

●開発課題としてのトイレの普及

さて、国際開発援助において衛生改善が



開発援助と人類学



建設中のトイレ

重要な課題となっている。二〇〇〇年の時点で二六億人が「基本的な衛生施設」すなわちトイレにアクセスがない状況にあると推定され、ミレニアム開発目標(MDGs)では「二〇一五年までに安全な水と基本的な衛生施設へのアクセスのない人口の割合を半減する」ことが指標の一つに掲げられた。その目標達成が危ぶまれて設定されたのが冒頭の国際衛生年である。

衛生改善が必要だとされる最大の理由は、下痢症などの疾病削減に対する効果が高いことだ。下痢症で失われる命は年間一八〇万人と推定され、しかもその多くは幼い子供たちの命である。下痢症は未だに五歳未満児の主要死亡要因の一つとなっている。一般的な下痢症をはじめ、赤痢、コレラ、腸チフスなどは糞口感染症とよばれ、便の中の病原菌が、飲み水や食物、手やハエなどを通じて直接的・間接的に人の口に入ることで感染する。こうした病気を削減するには、便が外部環境に広がらないような施設つまりトイレをつくり、それを利用することが重要になる。衛生改善の推進は、こうした疫学的な知識の上に立脚している。衛生改善の重要性を示す興味深い結果がある。一八四〇年から発行されている *British Medical Journal* (BMJ) という学術誌が昨年行った読者対象のアンケート調査で、「BMJ発行以来の医学の進歩で人々の健康増進に最も貢献したのもの」としてサニテーション(衛生改善)が選ばれたのだ。

二位のワクチン、三位のペニシリンを凌ぐ投票結果になっている。

トイレへのアクセス率がMDGsの指標とされたことは先に述べたとおりだが、援助機関や途上国の政府では、こうしたトイレのアクセス率の低さを根拠に、支援対象地域を決定するケースが多い。

衛生改善に対する開発援助のアプローチは、ハード支援からソフト支援へと転換している。過去の援助では援助機関主導でトイレの建設や建設材の配布などが行われたが、近年トイレの建設は学校や公共施設に限定される傾向にある。最近のアプローチでは、コミュニティの参加型活動や啓発活動を通じて住民の知識と意識を高め、住民自身のトイレに対する要求を創出し、自らトイレ整備を行う(あるいは野外排泄を根絶する)ことを奨励している。知識と意識を高める方法として、下痢症の感染経路の教育という常套手段に加え、人々の尊厳の向上や女性のプライバシーの保護に訴えかける必要性が最近認識されてきている。さらにそれぞれの文化の慣習やタブーを理解することが必要だと言われながらも、その実績はまだ極めて少ない(参考文献④)。

●トイレと文化の問題—むずびにがえて

開発援助における衛生推進で、参加型のアプローチが主流化してきていることは歓迎されるべき方向性だと考える。しかし、例えばギスにおけるブマサーラの慣習で

いったエミツクな情報は、外部者のファシリテーターが行う参加型のワークショップ等で自ずと露呈するとは限らない。それは、恥の感覚に結びついて言及するのが憚られたり、彼らの常識では当たり前すぎて問題視されない場合があるからである。

排泄という行為は、極めて本能的、普遍的な行為でありながら、排泄をめぐる行動やトイレの形態は文化によって実に様々である。特にトイレをめぐる文化的な慣習やタブーに関して理解するためには、エティックなデータには現れないエミツクな世界が存在すること、冒頭の「ず」と「づ」の例にみられたように、外部者が普通では気付かない「整理するための引き出し」があることを強く認識することが、まずは出発点になるだろう。

(すぎた えり/東洋大学講師)

《参考文献》

- ① 祖父江孝男 『文化人類学入門』中公新書 一九七九年。
- ② Karl Frankin, "K. L. Pike on Etic vs. Emic: A Review and Interview," SIL International, 1996. www.sil.org/klp/karintv.html
- ③ 松園万亀雄 「冗談と忌避の人類学」『文化人類学を学ぶ』有斐閣選書 一九七九年。
- ④ WSP-Andean, "An Anthropological View of Sanitation Issues in Rural Bolivia: A Summary," Lima: World Bank Office, 2007.